
 ニ ュ ー ス

日本の火山活動概況（2006年7月～8月）

気象庁

の変化は認められていない。

日本の火山活動概況（2006年7月～8月）

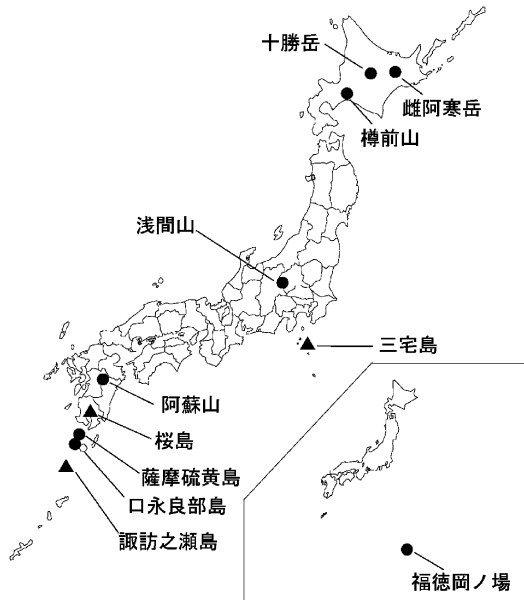


図 1. 2006年7月～8月に目立った活動があった火山
 ▲: 噴火した火山
 ●: 活動が活発もしくはやや活発な状態であった火山

●雌阿寒岳（ $43^{\circ}23'12''\text{N}$, $144^{\circ}00'32''\text{E}$ ）

火山活動は静穏な状態となった。

ポンマチネシリ山頂の赤沼06火口群や北西斜面06噴気孔列の噴煙活動は3月21日のごく小規模な噴火後しばらくは活発な状態であったが、活動は徐々に低下し6月中旬以降のやや活発な状態から、8月に入って静穏な状態となった。ポンマチネシリ山頂の96-1火口では、7月25日に北海道立地質研究所が行った現地調査によると、同火口の最高温度は約 190°C で、前回（2005年10月）の約 280°C と比べ約 100°C 低下し、2003年以降の低下傾向が継続している。

地震活動も低調な状態が続いており、GPSによる地殻変動観測では5月下旬に増設した観測点を含めて、特段

●十勝岳（ $43^{\circ}25'05''\text{N}$, $142^{\circ}41'11''\text{E}$ ）

62-2火口ではやや活発な噴煙活動が続いており、噴煙高度は火口縁上100～200mで推移した。噴煙活動に特に変化はみられていないことから、同火口の熱活動にも大きな変化はなく、高温の状態が続いていると推定される。

火山性地震は少ない状態で経過し、火山性微動は観測されなかった。GPSによる地殻変動観測では特段の変化はなかった。

●樽前山（ $42^{\circ}41'26''\text{N}$, $141^{\circ}22'36''\text{E}$ ）

A火口の最高温度は、7月9日に産業技術総合研究所が、7月30日および8月9日に気象庁が行った現地調査では約 $490\sim 500^{\circ}\text{C}$ を観測するなど（前回6月1日約 510°C ）、依然として高温の状態が続いていた。7月25日に北海道開発局の協力を得て実施した上空からの観測では、A火口、B噴気孔群で高温域が引き続き認められた。各火口の噴煙活動に特に変化はみられず、噴煙高度は火口縁上おおむね100m以下で推移した。

火山性地震の発生状況には特段の変化はなく、火山性微動は観測されなかった。GPSによる地殻変動観測では、火山活動に起因するとみられる変化はなかった。

●浅間山（ $36^{\circ}24'23''\text{N}$, $138^{\circ}31'23''\text{E}$ ）

噴煙活動がやや活発で、火山ガスの放出量のやや多い状態が続いている。

噴煙活動は引き続きやや活発で、噴煙高度は火口縁上概ね100～200mで推移した。8月31日に実施した上空からの観測では、火口内の最高温度は約 280°C で、前回の上空からの観測（2006年4月26日約 450°C ）に比べ低下傾向が認められるものの、火口内は依然として高温の状態が続いている。二酸化硫黄の放出量は、7月13日、8月29日に実施した観測ではそれぞれ、300～600トン/日、100～200トン/日で、8月に入りやや減少した。

火山性地震は、1日あたり2～24回とやや少ない状態で経過した。ほとんどは山頂火口直下のごく浅いところで発生したと推定される。火山性微動は、1日あたり0～2回と少ない状態だった。山体周辺のGPSによる地殻変動観測では特段の変化はなかった。また、傾斜計による観測及び光波測距観測では、火山活動の高まりを示すような変化はなかった。

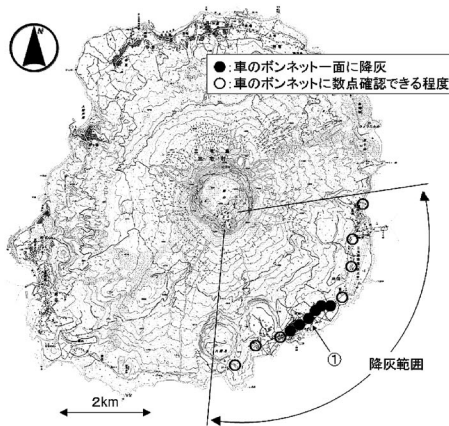


図 3. 三宅島 8 月 23 日の噴火で降灰を観測した調査地点および降灰の状況
左: 降灰を観測した調査地点, 右: 自動車のボンネットの上の降灰 (①の地点) の拡大図

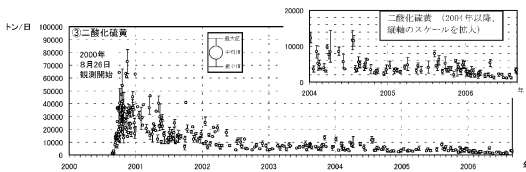


図 4. 三宅島 二酸化硫黄の 1 日あたりの放出量 (2000 年 1 月～2006 年 8 月)
今期間の二酸化硫黄放出量は 1 日あたり 900～4,000 トンと、依然として多量の火山ガス放出が続いている
観測は、陸上、海上および航空自衛隊、海上保安庁、東京消防庁、警視庁の協力により実施

▲三宅島 (34°05'37"N, 139°31'34"E)

8 月 23 日にごく小規模な噴火が発生した。多量の火山ガス (二酸化硫黄) の放出が続いている。

7 月 12 日～30 日と 8 月 4 日～23 日に、火口直下を震源とする振幅の小さなやや低周波地震が断続的にやや多い状態となった。8 月 22 日 11 時頃～23 日 05 時頃にかけて火口直下を震源とするやや低周波地震が一時的に多発し、8 月 22 日と 8 月 23 日の日発生回数がそれぞれ約 300 回に上るとともに、8 月 23 日 04 時～05 時の間に空振を伴う振幅のやや大きな低周波地震が 4 回発生した。04 時 28 分頃ごく小規模な噴火が発生し、灰色の噴煙が火口縁上 500 m まで上がり、南東に流れるのを観測した。同日午前中に行った現地調査で、山頂火口の東～南約 3 km の範囲で微量の降灰を確認した (図 2)。三宅島での噴火は 2006 年 2 月 17 日以来である。

8 月 23 日 22 時過ぎにも再び火口直下を震源とするや

や低周波の地震が増加し、22 時 38 分には空振を伴う振幅のやや大きな低周波地震が発生した。この地震により、三宅村神着で震度 1 を観測した。地震発生時の噴煙の状況は、視程不良により確認できなかったが、8 月 24 日午前中に行った現地調査で降灰は確認されず、その他の観測データにも特段の変化はなかった。また、7 月 23 日、7 月 25～27 日にも一時的に多発し日回数が 100 回を越えたが、地震増加の際に、噴煙の状況や GPS による地殻変動観測データには特段の変化はなかった。なお、期間を通じて火山性微動は観測されなかった。

噴煙活動は引き続き活発で、噴煙高度は概ね火口縁上 200～300 m で推移した (最高は 500 m)。

7 月 14 日、27 日、8 月 3 日、25 日及び 29 日に実施した観測では、山頂火口からの二酸化硫黄放出量は 1 日あたり 900～4,000 トンで、依然として多量の火山ガスの放出が続いている (図 3)。なお、三宅村の火山ガス濃度観測でも、山麓でたびたび高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

東京消防庁の協力により 8 月 22 日に実施した上空からの観測では、火口内の地形等に特に大きな変化はなかった。また、火口内温度の最高は約 90℃ (前回 4 月 18 日: 約 140℃) で、長期的には低下傾向が続いている (図 4)。

地磁気全磁力連続観測では特段の変化はみられていないことから、地下の熱的な状態に大きな変化はないものと考えられる。

GPS による地殻変動観測では、山体浅部の収縮を示す地殻変動は徐々に小さくなりながら、現在も継続している。



図 5. 三宅島 山頂火口の状況 (8月22日 北西側上空より)

●福徳岡ノ場 (24°17.1'N, 141°28.9'E)

7月10日, 26日に海上自衛隊が, 8月25日に第三管区海上保安本部が行った上空からの観測で, 火山活動によるとみられる変色水が確認された。

●阿蘇山 (32°53'01"N, 131°05'49"E (中岳))

火山活動は静穏な状態となった。

中岳第一火口では, 湯だまり量は10割で経過し, 表面温度も60℃以下と低く, 熱活動は低調な状態となった。また, 土砂噴出もないなど火山活動は静穏になった。地震活動, 噴煙活動は低調な状態で, 地殻変動観測や, 地磁気全磁気観測でも特段の変化はなかった。

▲桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

噴火活動は小規模な噴火が時折発生する程度の比較的静穏な状態になった。

南岳山頂火口では, 従来同様, 小規模な噴火を繰り返している。

昭和火口では6月4日に噴火が始まり, 6月20日まで小規模な噴火を繰り返していたが, 6月21日以降噴火は観測されていない。なお, 8月下旬以降時折弱い噴気が確認されている。

7月26日に海上保安庁が行った上空からの観測では, 昭和火口は前回6月16日に比べ, 火口の大きさや噴出物の堆積状況に特段の変化はなかった。

火山性地震や微動はやや多い状態が続く, 振幅のやや大きいものも時々発生した。

地殻変動観測では, 始良カルデラの地下深部へのマグマの蓄積を示す長期的な地殻変動は継続しているが, 桜島直下への大規模なマグマの移動を示す地殻変動は認められていない。

●薩摩硫黄島 (30°47'35"N, 130°18'19"E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動は依然としてやや活発で, 噴煙高度の最高は火口縁上800mであった。

火山性地震はやや多い状態で経過した。また, 7月13日に継続時間が約1時間の火山性連続微動が発生したほか, 8月19日~20日にかけてごく小規模な火山性微動が3回観測された。

●口永良部島 (30°26'36"N, 130°13'02"E (古岳))

2005年7月以降火山性地震は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いている。火山性微動は観測されなかった。監視カメラ(新岳の北西約4kmに設置)による観測では, 噴気は認められなかった。

▲諏訪之瀬島 (29°38'18"N, 129°42'50"E (御岳))

7月26日, 27日, 30日, 8月13日, 14日および28日に爆発的噴火が発生したほか, 小規模な噴火も時々発生し, 噴火に伴い, 火山性連続微動が観測された。十島村役場諏訪之瀬島出張所によると, 7月29日~31日と8月1日, 12日~15日に集落(御岳の南南西約4km)で降灰が認められた。火山性地震はやや多い状態で経過した。

(お知らせ) 最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

火山活動解説資料

URL http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm

(文責: 気象庁地震火山部火山課 相澤幸治)

○機関研究員の募集について

【名古屋大学大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター】

職 名: 機関研究員

募集人数: 1名

所 属: 名古屋大学大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター

専門分野: 固体地球物理学分野研究の手法等は問わないが, 地震, 火山, 防災に関する研究への貢献を期待する。

応募資格: 採用時に博士の学位を有し, 35歳未満の者

任 期: 採用から原則2年間。ただし, さらに1年間の延長が認められることがある。

任用時期: 採用決定後のできるだけ早い時期

待 遇: 交通費支給(限度額あり), 社会保険, 厚生年金制度あり。

提出書類: (1) 履歴書